

Sex Differences in Health Consciousness and Its Prognostic Impact in Patients with Heart Failure-A Report from the CHART-2 Study-

著者	阿部 瑠璃
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	11301甲第17901号
URL	http://hdl.handle.net/10097/00123799

学 位 論 文 要 約

博士論文題目 Sex Differences in Health Consciousness and Its Prognostic Impact in Patients with Heart Failure -A Report from the CHART-2 Study-

(心不全患者における健康意識が予後へ及ぼす影響の性差に関する検討—CHART-2 研究の知見より—)

東北大学大学院医学系研究科医科学専攻

内科病態学講座 循環器内科学分野

学籍番号 B4MD5004 氏名 阿部 瑠璃

【研究目的】健康意識は心不全患者における生存率および生活の質を改善するために最も重要な要素の一つであり、治療において注目されている。しかしながら、心不全患者における健康意識が予後へ及ぼす影響の性差については検討されていない。そこで、本研究では東北大学循環器内科が 2006 年に開始した第二次東北慢性心不全登録(CHART-2: Chronic Heart failure Analysis and Registry in the Tohoku distinct-2)研究に登録されたステージ C/D の慢性心不全患者における健康意識とその予後の影響を、特に性差の観点を加えて検討した。

【方法】2006 年～2010 年に登録が行われ、現在も追跡調査を継続中である CHART-2 研究に登録された 10,219 人のうち、2012 年 9 月の時点で死亡・追跡中止を除く 8,153 人に健康意識を評価するためにヨーロッパ心不全セルフケア行動スケール(EHFScBS)(12-60 点)のアンケートを依頼し、5,177 人から回答を得た(回収率 63.5%)。そのうち、心不全を発症したステージ C/D 患者 2,233 人(平均年齢 72 歳、女性 29%)について、健康意識が予後へ及ぼす影響の性差について検討した。

【結果】男性患者 1,583 人は、女性患者 650 人よりも健康意識が低く(中央値 33 対 31 点)、若年(71 対 73 歳)で、左室駆出率が低く(56 対 61%)、BNP 値も低かった(72 対 98pg/ml)(全て $P<0.001$)。男性と比べ女性では、息切れ・下腿浮腫・疲労に関する医療従事者への相談、息切れ時の安静や日中の休憩、インフルエンザ予防接種の頻度が有意に高かった(全て $P<0.05$)。アンケート発送日の 2012 年 9 月 3 日から 2015 年 3 月 31 日までの中央値 2.6 年の観察期間中に、健康意識が高い(12-32 点)患者 1,090 人は、健康意識が低い(33-60 点)患者 1,143 人と比較して、男性で有意に死亡率の増加と関連していた(補正ハザード比 1.44、95%信頼区間 1.05-1.98、 $P=0.02$)。が、女性では関連を認めなかった(補正ハザード比 0.80、95%信頼区間 0.47-1.36、 $P=0.40$)(交互作用の $P=0.02$)。EHFScBS の 3 要素のうち、高いアドヒアランスは、女性では死亡率が減少したが、男性では減少しなかった(交互作用 $P=0.003$)。アドヒアランスの項目の中で、毎日の体重測定は女性において死亡率の減少と関連していたが、男性では関連していなかった。一方、運動習慣のある患者は男女ともに死亡率の減少と関連した。

【結語】女性の心不全患者は男性よりも健康意識が高く、アドヒアランスの高さは女性における良好な予後と関連する。